

4. 土器文様の解読へ向けての序

縄文土器は、中期に限らず、ほぼ器面全体にわたり文様が縦横に施されている。あたかも空白部を残すことに対する恐怖でもあるのかと疑える程、その執着心は強烈である。口唇上から土器の底面に到るまでが全てその対象となったこともある。だが、あくまで基本となるのは横方向への展開であった。一般的には、口縁部と胴部に文様帯が配されていると言えるのである。そして、それぞれの文様帯は、一方では依存しあいながらも独自性を有しており、内部においてはいくつかの文様単位が繰り返して展開されるのである。すなわち土器面に施される文様は、全てが縦・横の計画的な分割軸に則って、緻密に構成されていると判断されるのである。

我々はこうした縄文土器に、時には芸術的な美しさを感じる。だが同時に、何故、このような緻密な作業に労力と技術を傾けねばならなかったのか。何故、これほどの芸術作品が日常生活の中で使用されていたのか。また、何故、特定の芸術家ではなく、一般の人々に作り得たのか等々の疑問もまた湧出するのである。縄文土器とは、まさしく彼ら自身の反映としてあるのではないだろうか。我々は土器に編年の為の道具としての役割だけでなく、彼らの社会あるいは世界観を垣間見る為の窓として、つまり彼らの行動様式を知る為の媒介としての可能性を新たに付与すべきではないだろうか。

こうした問題意識の設定は〈伝統的〉で〈科学的〉な考古学からは拒否される傾向にあるのであろうが、偶々、下南原遺跡から3点の全体の文様構成がわかる土器が検出されたので、なにはともあれ、個々の土器を読み込んでみようと思う。

なお、第31図に示した土器文様の展開模式図1～3は、第20図の実測図1～3と同一の土器である。また図版6には各方向からの撮影写真が掲載されているので、併せて参照願いたい。

1. 4Cグリッドから発見された土器で、胴下半を欠く深鉢形土器である。口縁には山形の小突起が4単位配されている。つまり、外観的には4単位構成の土器であることが明示されているのである。文様帯は口縁部と胴部の2帯構成となっている。口縁部文様帯には小突起下と小突起間に配される大小2種類の渦巻文と渦巻文間の2個の杵状文が組み合わさって1単位文様が構成されており、それが4単位で器面をめぐる円環を閉じている。胴部文様帯には大小の渦巻文の直下から、1対の隆帯と蛇行隆帯が垂下されている。つまり、胴部文様帯においても基本的な分割軸は口縁部文様帯と同じ部分に当たっていると言えよう。

だが、それだけの観察で済んでしまう程、縄文土器とは単純なものだろうか。否。以下に細部の検討をするが、説明の都合上、展開図の左から順に1～4と記号化しておく。完形としての実物で見れば、1と3、2と4は、それぞれが相対する部分に配置されているという〈関係〉にある。

まず、小渦巻文を検討しよう。渦の巻く方向と尾ののびる方向は1～4のいずれも一致しているが、渦巻文の直上に施される刺突文は1と3には有り、2と4には無い。一方、小渦巻文下にくる蛇行隆帯も1と3、2と4に大別して考えられる。すなわち、前者の蛇行はその度合いが緩やかで、後者は強い。そして、前者の隆帯には両側に沈線が添えられておらず、後者には添えられていると

いう相違点が明確に認められるのである。これを小渦巻文と蛇行隆帯との関係でいえば、刺突の付加された渦巻下には沈線が添えられずに蛇行の緩い隆帯が垂下され、刺突が伴わない渦巻下には沈線が添えられた屈曲の強い蛇行隆帯が垂下されていると言いかえることができる。それは、ある意味では1～4の各单位ごとの施文に費されるエネルギー量の総和はバランスが保たれているとも言い得ようか。ともかく、以上から1と3、2と4は、それぞれが対称性を有するように文様帯内に分割配置されている事実が浮上してきた。

だが、ここで大渦巻文についても分析を加えねばなるまい。刺突が渦巻上に付加されるという点では小渦巻文と基本は同じである。ここで注意されるのは1、3に刺突が施されれば、当然2、4では刺突が省略されるはずなのに、2には刺突が配されるという点である。ここで2と4は対称性が破れているのである。

また、口唇直下の沈線は1～4内で自立的にひかれているべきなのだが、3のみ杵状文に接続させることで他と趣を変えている。さらに渦巻文上の刺突の数も1では大が7で小が4、3では大が6で小が3というように微妙に変えてある。刺突数が少ない部分での相違だけに、無意識的に違いが生じてしまったとは考え難い。全てが計画的であった可能性が高い。やはり、1と3の対称性は破られていたのである。

以上をまとめれば $\langle a + b + a' + b' \rangle$ ということになるだろうか、つまり、この土器は、一見、同じ形の単位文様が360°の方向全体にわたって、連続して繰り返すことによって器面を一周するという、いわゆる並進対称性を有しているかのごとく観察されたが、細部の検討から〈対称性の破れ〉が隅々にまで計画的に具体化された構成体であることが明瞭となったのである。そして、最も外に向かって明示される口縁部においては、1カ所のみ他と違えることで、この土器の文様が円環を閉じることを否定しているのである。

2. 4Cグリッドに位置する第1号土器から正位の状態で検出された。口縁に小突起が4単位配された深鉢形土器で、胴下半を欠く。文様は渦巻きを基調としたモチーフと内部に刺突列を充填させた長楕円形杵状文がセットとなって器面をめぐる。各单位文様を展開図の左から、それぞれ1～4と仮りに呼ぶことにする。

この土器も1の土器同様、口縁部の小突起から4単位構成であることが明示されている。だが、小突起下に位置する渦巻文（以下、上の渦巻文と略称する）の渦の巻く方向に着目すると1、2、4は左巻きだが、3に限って反対の右へ巻いていることがわかる。小突起の右斜め下に配されている渦巻文（以下、下の渦巻文と略称する）は全て左巻きである点をも考慮すると、3の右巻きは計画的な所産であることが窺えよう。

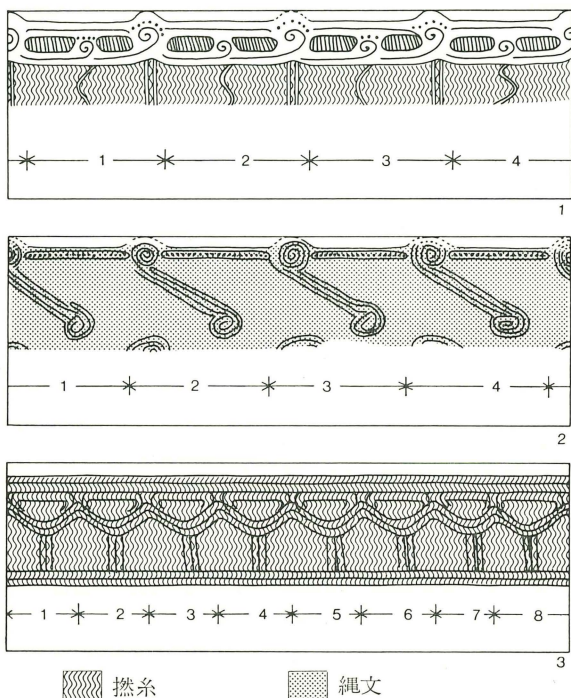
ところで、上下の渦巻文は互いに入組むことで一個のモチーフと化している。だが、その入組み方にこの土器の構成原理が色濃く反映されているので順を追って見て行きたい。

まず、お互いの渦巻文の入組む度合についてであるが、2、3は上下共、単に渦巻きの尾が並列されるのみで止まるが、4、1は下の渦巻文が上の渦巻文に一部巻き込まれている。つまり、このレベルで考えると1・2、3・4のそれぞれの境界を通過するように土器が2分割されていることになる。

一方、下の渦巻文はそれをおおっている沈線との関係の仕方でも分割される。

1、2は渦巻をおおっている沈線が連続的に渦へと突入しているが、3、4では渦巻文と断絶関係にある。このレベルでの分割軸は第1点での渦巻文の入組む度合の場合とは丁度90度回転した位置に当る。

下の渦巻文をおおう沈線が1、2では途中で反転しながら連続的に渦巻文へと描かれていく点を見た。だが、その反転する位置が1では下の渦巻に近い部分にあり、2では上の渦巻に近く設けられている。3、4は下の渦巻とは連続的ではなく、切れているにもかかわらず、その切れる位置がそれぞれ2、1の場合と一致する。従って、この場合も結局2・3と4・1の関係に2分割されるのである。



第31図 下南原遺跡出土土器（第20図1～3）展開模式図

まとめると、円環としてのこの土器は最も外示的である口縁部に1カ所、破れを用意しながら、文様構成における各レベルで90度のずれをもって、3回にわたった2分割が実現されていたと言える。従って、結果的には1～4は類似しながらも全てが異なる文様に仕上げられていたのである。記号化すれば $\langle a + a' + b' + b \rangle$ ということになる。つまり、この土器も＜対称性の破れ＞を施文上の基本構造としていた事実が明白となったのである。

3. 第1号土壙から2と並んで正位の状態で検出された。胴下半を欠く深鉢形土器である。

この土器には突起や把手は無く、単位を明示する部分が認められない。数えれば、連弧が8単位整然と配置されてはいるのだが、図版6の写真でも窺えるように、外観を一見しただけでは連弧の数は不明瞭なのである。つまり、この土器は上記した1、2とは文様を施文するうえでの意識が異なっていると言えよう。また、文様帯を頸部部にめぐらせた3本沈線で分帯する点も1、2にはみられない。

ただ、良く観察をすると、連弧から垂下する3本沈線が5～8の分割部においては部分的に4本になっており注意される。この土器には3本沈線を基調にしたモチーフが施文されているのだが、その沈線は半截竹管によっている。つまり、3本沈線を作出するということは中央の1本をだぶらせるように2回にわたり平行沈線を描くということであり、3本であるべき沈線が4本化しているということは、とりもおさず、乱れた半截竹管の重ねをしているということを意味する。ここで問題となるのは5～8の部分に限って4本化しているのは単なる偶然か否かという点である。1～4がきちっとした3本であるにもかかわらず、その相対する位置にある5～8が乱れているというの

は極めて示唆的であり、1、2の土器を分析した今となつては、土器製作者の意図を感じざるをえない。勿論、表・裏という意識の違いから、たまたま5～8に関しては雑な施文になってしまったものとも考えられるが。記号化すれば $a + a + a + a + a' + a' + a' + a'$ ということになろう。

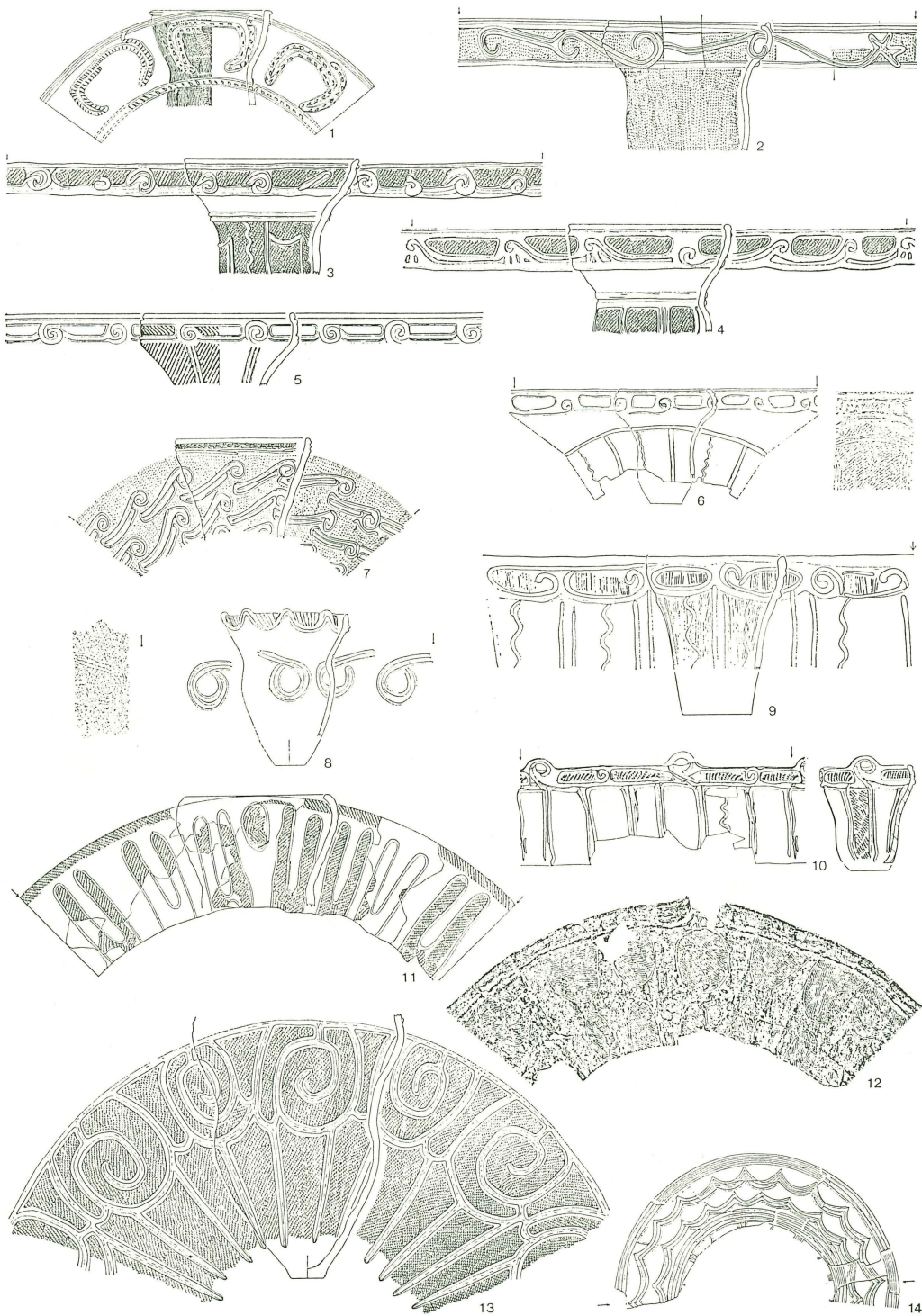
以上のように、下南原遺跡出土の3点の土器は分析された。これらをまとめて断章化すると以下のごとくなる。

- ① 同一の単位文様がくりかえし器面を一周すると今まで考えられていた加曾利E式土器も展開図の検討から、そう単純には断定できないことが明瞭となった。
- ② 同じ単位文様をくりかえすことで円環が閉じられることを拒絶する部分が用意される。土器の正面観とも関係してこよう。
- ③ 土器には一定方向からの視線を意識して全体的な文様の配置関係が決定された可能性がある。
- ④ 土器面に施された文様は複数単位に分割されているが、偶数単位の場合には相対する部分に当たっている文様を意識的に違える傾向にある。だが、分割された各単位ごとの施文に要するエネルギーの総和は、一部位を除き、ほぼ一定化している。
- ⑤ 上記した点を一言で要約すれば、これらの土器は〈対称性の破れ〉を施文上の基本原理としていたと言える。
- ⑥ 連弧文土器は3本沈線に象徴されるように3にこだわりを持っているように考えられるが、反面、全体的には単位性を潜在化させた構成体となっている。

ところで、第32図に加曾利E式土器を中心とした土器の展開図を集成しておいたが、それらと比較対照すれば明かなように、下南原遺跡出土の土器群は一般的な加曾利E式土器の施文構造と一致している事実が指摘されよう。すなわち、上記した断章は加曾利E式土器の基本構造の列記でもあると換言し得るのではないかと私考している。さらに〈対称性の破れ〉は加曾利E式土器だけにとどまらず、前期前半、具体的には諸磯式土器周辺にまでさかのぼり得るのではないだろうかとも密かに考えている(鈴木1980)。勝坂式土器を反対称(谷井1979)、あるいは $3 = 2 + 1$ (嶋崎1979)と認識した視点も、以上の基本原理にとり込まれる可能性がある。越後新潟の火炎土器(小林1981、金子1981)に関しても例外ではなさそうである。

このように、管見に触れた資料の検討からは、こうした原理が時・空を超えて、かなり拡がることが予想される。つまり、縄文人の土器に施文をするうえでの基本原理—分類・論理体系—世界観は一定の地域、時代においては顕在化していて可能性がある。つまり、こうした原理が根強く認められるということは、各種遺構等、さらにそれらの集落内での配置関係にも全く影響が及ぼされなかったとは断言し難くなったということを意味しよう。むしろ、集落の空間構成にも一脈通じる面が窺えるようになるのではないかとさえ期待されるのである。だが、現状では全体的に土器の展開図が僅少であり、これ以上は不分明と言わざるをえない。

単に土器は編年の為だけにあるのではなく、いかに文様相互の配置関係のわかる展開図が必要かという点だけでも、ここでは指摘しえたかとは考えるが、自分自身への今後の課題の方が山積みしてしまった。つまり、今後は豊富な展開図の集成と分析を実践しながら縄文土器の基本構造をさら



第32図 各遺跡出土土器の展開図集成 1(西原)、2・7・13(花影)、3・4(坂東山)、(鶴川丁)、
6(西野)、8(平山橋)、9(金堀沢)、10・14(恋ヶ窪)、11(小室天神前)、12(前原)

に明確にしていきたい。と同時に、土器は地域差、時間差を反映する点も事実であり、それは土器構造のどのレベルでの問題となるのかも検討していきたい。こうした作業は当然、現行の型式論あるいは様式論と低触することになるであろう。

(鈴木 敏 昭)

5. <打製石斧> について

打製石斧の諸々の考察にはいる前に一応付記しておきたい点がある。それは、今回の調査において得られた資料総数が欠損品をも含めて総数19点と極めて微量であったという事実である。従って以下で検討される事項の多くには、相当の限界も、またついてまわっていることは否定できない。だが、傾向だけでも指摘し得たならば本稿の役割は完了するものと考え、若干の無理は承知で認めることにした。

それでは、打製石斧についての若干の考えをまとめてみたいと思う。打製石斧は、いったいどのようなにして、そして何に使われたのであろうか。しばしば打製石斧の多量の存在をもって農耕が行われたひとつの証拠とする意見を耳にする。つまり、彼らにとって、打製石斧は鋤なのである。また縄文中期農耕の否定論者は植物質食料の採集、あるいは堅穴住居の構築等の際に使用する土掘り具であるとの見解を披瀝しているようである。だが、打製石斧が土掘り具であるとする点では、両者とも共通しており、問題を複雑にしている。ある意味では、農耕を肯定するか否かという信念が、石器の機能を決定づけているようにさえ見受けられるのである。従って、ここでは農耕の存否に関しては一定の距離を保ち、できるだけ石器そのものを見つめるように努力してみたいと考える。

さて、現状では、打製石斧が土掘り具であるとする意見が大勢を占めている。一見、疑問の余地がないかのごとく考えられているのであるが、果たして如何であろう。打製石斧を見て、どうも土を掘る道具としては適さないのではないかと感じるのは筆者だけなのであろうか。中には、大きさ、形状からいって全く不適と思われるものがかなり存在するのである。とりわけ、一方の意見としてある堅穴住居を掘る場合には殆んど不適であろう。なぜなら、ロームのような粘性の強い対象物では石器にこびりついてしまい、掘るにしても相当な困難が予想されるからである。また反面、当遺跡のように粘性は無くとも礫混りの砂利層では、やはり難しいと言わざるをえない。打製石斧が土掘り具として有効なのはサラサラした感じであまり粘性のない土を対象とした場合ぐらいであろう。しかし、打製石斧よりもさらに有効な道具は他になかったのだろうか。今日残存していないとは言え、木もしくは竹の掘り棒を想定することは困難であろうか。そのような考えを裏付ける実験データが公表されているので少し触れたい(藤森1970)。それによると打製石斧を柄につけて掘る場合と、棒で掘る場合では、後者は前者の半分以上の労力ですむという(ただし、土の掻き出しは手で行った場合である)。貴重な事実の集積であり、こうした観察は素直に受け入れておきたい。

次に名称の起こりである伐採具としての可能性について検討してみたい。この点に関しても藤森氏による実験データ(藤森1970)が参考になろう。氏らは、大形で、刃が厚く、頑丈で幅広の打製石斧を使用しており、それによると直径10cmもある栗の立木でさえも5分で切断したという。つま